

VI. プレFDの取り組み

I. 大学院生のための教育実践講座

本講座は、高等教育研究開発推進センターが主催し、将来、大学教育に携わることが希望する本学の大学院生(OD・PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2019年度は、8月23日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。第14回まではFD研究検討委員会との共催でしたが、同委員会の改組に伴い、15回目となる今回は上記センターの単独開催となりました。

当日は、さまざまな専門分野から39名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークなど、多様なプログラムをもとに、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。全てのプログラムに参加した受講生に

は総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1:まったく満足していない～5:非常に満足している)で評価してもらったところ、満足度の平均は4.6でした。また、昨年度に引き続き今年度もポスター発表形式でグループごとに議論のまとめと報告を実施しました。やや時間不足の感はありましたが、その評価も4.6となり同じく好評でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問(自由記述)では、「研究能力を高めることばかり、目がいていましたが、教育という点でも高めなければならないと思いました」、「授業を組み立てる上でどのようなことを考えればよいか明確になった」、「(授業全体としての)ゴール設定の重要性を痛感した」といった回答がありました。受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

大学院生のための教育実践講座：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>
<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2019.php>

2019年度のプログラム

10:00～	開会式	挨拶:飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授) 趣旨とプログラムの説明:鈴木 健雄(高等教育研究開発推進センター特定研究員)
10:20～	セッション1	ミニ講義1「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」: 松下 佳代(高等教育研究開発推進センター教授)
10:45～	セッション2	グループ討論1:「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」「授業デザイン」の4つの部会に分かれて議論
11:45～	セッション3	ランチと自由討論
13:00～	セッション4	コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」: 蓮 行(劇団衛星主宰)
14:20～	セッション5	ミニ講義2「大学における教育と研究—学習支援の現場から—」: 福田宗太郎(大阪体育大学学習支援室主任)
15:05～	セッション6	グループ討論2:「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」「授業デザイン」の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
16:05～		グループ討論整理
16:40～	セッション7	発表と全体討論:ポスター形式で4部会から11グループのポスターを掲示し、活発な議論を展開
17:40～		ラップアップ
17:55～	閉会式	挨拶・修了証授与:飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授) 閉会式終了後 情報交換会(～19:30)



2. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2019年度は2月5日・6日・7日の3日間で実施されました。受講生は12名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(教育学研究科4名、経済学研究科2名、医学研究科2名、人間・環境研究科1名、情報学研究科1名、地球環境学1名、経営管理大学院1名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート

(12名中12名から回答、回答率100%)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.8)」、「内容に関する興味を高めるための配慮があった(3.8)」、「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた(3.8)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.8)」(いずれも4段階評定)など高い評価が得られた。自由記述からは、「短期集中という中で非常に濃密な学習機会であり、インプットもアウトプットも多かったため、いい意味で疲れる授業であった」、「『教える』ということが、ときに価値観の押し付けにならないかということや、多様な背景を持つ学生たちへの配慮が十分になされているかということを考える機会になった」、「人に教えるということは決して一方的に内容を伝えるのではなく、相手に能動的に参加してもらうための工夫が重要だと思いました」、「模擬授業をここまでシステムティックに作成できる機会はなかなかないので、大変貴重な経験となった」、「講義を通じて何かを効果的に伝える技術を身につけることが、学会発表等の自身の研究の場においても、より広く、何かを伝えるという事柄一般について、大きく汎用性のある有用な技術だと感じ、本当に有意義な学びを得ることができました」といった様々な声が聞かれました。



3. 文学研究科プレFDプロジェクト

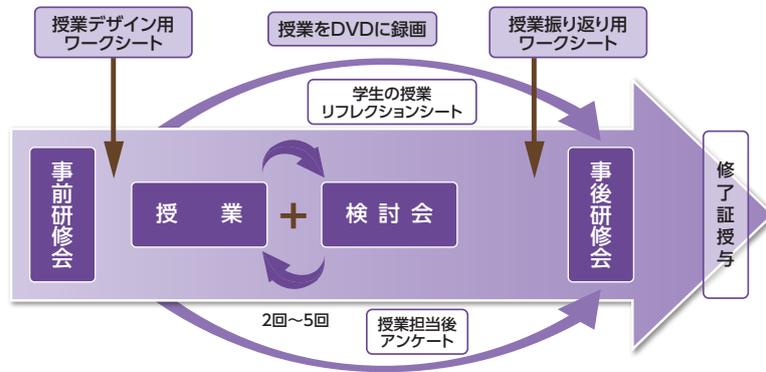
文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD・PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。年度はじめの事前研修会、OD・PDが講師となり実施する学部生向けの授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした参加者には、本学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約160名が修了証を得ています。

2019年度は、文学研究科よりコーディネーター5名、教務補佐員4名、講師21名が参加し、高等教育研究開発推進センターより4名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

●文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



文学研究科プレFDプロジェクト「系ゼミナール」の流れ

2019年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

- 杉村 靖彦：文学研究科教授／統括コーディネーター
- 大塚 淳：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター
- 太郎丸 博：文学研究科教授／行動・環境文化学系コーディネーター
- 永原 陽子：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター
- 塩出 浩之：文学研究科准教授／基礎現代文化学系コーディネーター
- 橘 英希：哲学基礎文化学系教務補佐員
- 長岡 徹郎：行動・環境文化学系教務補佐員（前期）
- 池田 裕：行動・環境文化学系教務補佐員（後期）
- 朴 美暎：基礎現代文化学系教務補佐員
- 飯吉 透：高等教育研究開発推進センター長・教授
- 松下 佳代：高等教育研究開発推進センター教授
- 田口 真奈：高等教育研究開発推進センター准教授
- 鈴木 健雄：高等教育研究開発推進センター特定研究員



2019年度のプレFDを振り返って

統括コーディネーターから

2009年度に始まった文学研究科プレFDプロジェクトも、今年で早くも11年目となりました。過去10年の試行錯誤とそれを踏まえた蓄積がしっかりと継承され、今や将来の大学教員のためのさわめて洗練された教育実習システムとなっています。今年度も昨年度に続いて、哲学基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の三つの系で実施されました。各系の教務補佐員から毎回送られてくる授業報告と検討会報告を拝読するだけでも、このゼミナールが本来の教育実習としての機能は言うまでもなく、講師間の相互啓発、将来の大学教員を育てる場に参加することによる学部生たちの学びなど、多層的で豊かな意味をもつ機会になっていることがよく分かります。また、2015年度に始まったコンソーシアム京都との連携によるリレー講義「人文学入門」は、昨年度から第二期に入り、「京都で学ぶ人文学」として再出発しました。来年度も継続することになっていますが、このプレFD課程を修了した講師が、京大の外に出て授業を行うことでさらに教育経験を積み、その能力を向上させていくことを期待しています。

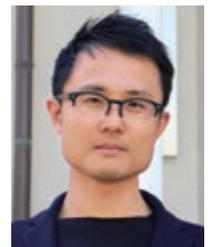


文学研究科教授
杉村 靖彦

各系のコーディネーターから

●哲学基礎文化学系

この度、初めてプレFDのコーディネーターを担当させていただきました。多岐に渡るテーマを各講師が数回づつだけリレー講義する、という講義形態にイメージがつかめなかったのですが、いざ始めてみると教務補佐の橘さんの手慣れた采配によりすべてスムーズに運びました。講師の方も、初参加の人からベテランまで皆、専門的になりすぎることなく、受講者の目線に立って授業を行っており、参加した私自身勉強になりました。受講した学生たちも非常に意欲的で、積極的に質問やコメントをしていたのが印象的でした。ただ惜しむらくは、参加者があまり多くなかったことでしょうか。授業の構成上、話題がバラバラになってしまうのでその分学生へのアピールが薄くなるのかもしれませんが。例えば事前に講師全員で話し合う機会を設けることで、テーマに統一や関連性をもたせたり、入門から発展や応用までの流れなどを出せれば、授業全体のメッセージもより明確になり、多くの学生に受講してもらえるようになるのではないかと思います。



文学研究科准教授
大塚 淳

●行動・環境文化学系

プレFDプロジェクトでは、自分自身の研究に関連する内容を初学者向けに講義することが求められますが、とてもよいことだと思います。研究と教育を完全に切り分けてそれぞれ別々の内容を追求する先生もおられますが、大学教員の業務は増加傾向で、ますます研究を俗世から隔絶されたアジールとすることは難しくなっています。そもそも研究者が教育も担うというシステムは、高校までの教育にはない、大学教育の特色です。その特色を活かす工夫をポストドクの皆さんには期待しています。自分の研究を初学者にわかりやすく話すことは、自身の研究をふだんとは違った角度から眺める機会にもなります。授業の成果が自分の研究に役立つこともあります。教育は「負担」ですが、自身の研究を磨く機会でもあります。学生にとってもプロの研究者ならではの授業を受けることは、大きな刺激になるでしょう。このような授業は、京大生のような物分りのよい学生相手でなくても可能です。ぜひチャレンジして下さい。



文学研究科教授
太郎丸 博

●基礎現代文化学系

昨年度に引き続いて、二度目の「プレFD」担当となりました。昨年度以上にはっきりと認識できたのは、授業後の検討会で、参観者のコメントや学生のリフレクションシートを通じて行うフィードバックの意義です。授業→検討会→次の授業というサイクルを通じて、講師の皆さんの教え方が改善されるのがよく理解できました。当たり前のことながら、板書する場所や字の大きさ、声の大きさのような具体的なことから始めて、学生からどう見えて(聞こえて)いるかは教えてもらわないとなかなか分からないので、将来の大学教員にとって貴重な場といえるでしょう。

授業のしかたという点では、学生によるディスカッションや資料読解などを取り入れた授業もあれば、クラシックな講義形式の授業もありで様々でした。それぞれのスタイルに長所あるいは持ち味があり、いずれにしても重要なのは、学生の理解や反応を意識しながら授業を組み立てることにあるように感じました。研究の世界と、学生の学んできた/生きてきた世界との中間地点を探るという課題は、私たち大学教員も共有するものであるように思います。



文学研究科准教授
塩出 浩之

4. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

2015年度より、プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、文学研究科が提供、大学コンソーシアム京都との連携のもと、本学の学生を含め、様々な大学に所属する学生を対象とした授業が提供されています。本プログラムでは、修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成をおこないます。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

2019年度の開講テーマは「つながりを問い直す：コミュニティとコミュニケーション」でした。コーディネーター1名のもと、社会学、歴史学、心理学、哲学といったさまざまな専門分野出身の若手講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。一方的な知識伝達だけでなく、受講生間のディスカッションを促す工夫が凝らされた本講義を通じて、受講生は、「コミュニティ」と「コミュニケーション」について広く学ぶことによって、複雑に絡み合った「つながり」の綾を解きほぐすことを試みました。



●文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

2019年度の授業を振り返って

京都産業大学非常勤講師 長岡 徹郎（文学研究科思想文化学系宗教学専修出身／講師リーダー） -----



私は講師リーダーとして全ての授業を参観させていただきました。最初は固い雰囲気だった学生たちも、アクティブラーニングを通じて徐々に打ち解けていき、最後の授業では積極的に意見を出し合うまでになりました。その成長の要因は、講師と学生との距離の近さにあると思います。講義形式の授業と異なり、本講義では講師と学生との交流が活発になされます。講師は学生と言葉を交わすことによって、学生たちが、講師にとって当たり前の前知識を知らないことや、講師にはない独特の感性を持っていることに気がつくことができるのです。アクティブラーニングのおかげで、学生を理解することの重要さと難しさを改めて実感したという講師もいました。学生一人一人を思い浮かべながら、各講師が学生の創造力を刺激できるように授業をデザインしたからこそ、学生たちから生き生きとした思考を引き出すことができたのだと思います。

京都大学非常勤講師 別役 透（文学研究科行動文化学系心理学専修出身／「他者とつながる動物心理学」の回を担当） -----



2018年度に引き続き、19年度の担当講師の一人として参加させていただきました。以前に参加した文学研究科プレFDプロジェクト「系ゼミナール」での授業は自身の研究テーマそのものに近い内容でしたが、本授業では全体の統一テーマに沿うべく、より広い観点から内容を準備しました。アクティブラーニングにさらに比重を置いた分、限られた講義部分の吟味にも注力した印象があります。実際の授業で学生と議論していく中では、自分の話した内容を学生がどう理解しようとしたのか、どういったアイデアと結びつけるのか、といったことを目前で確認でき、新鮮な発想からこちらが学ぶことも多々ありました。また、自分の専門分野（動物心理学）はいわゆる理系的な側面もあるのですが、この分野が人文学の観点からどのような意義を持ちうるのか、といったことについても、本授業を通してあらためて見つめなおすことができました。こうした点で、本授業は教師側の自分にとっても非常に有意義な経験となったと思います。